

はじめに——バンコクの街角で——

バンコクには相当数のインド系の人々がいることは聞いていたが、この街に住んでみて予想以上にその姿が目立つのには驚かされた。独特のターバンで、インド人の典型的な身なりのように誤解されているシク教徒の姿は、繁華街を歩けばすぐに目に入る。よく注意してみると、ターバンでも筒型で純白のものを着用している人たちがいる。シク教徒のなかでは数が少ないが、タイの経済界に有数の企業家を輩出している宗派の人々である。インド人女性のサリー姿もよく見かける。運がよければ、圧倒的にタイ人が優勢を占めている路端の物売りのなかに、インドの農民の姿をそのまま移したようなドーティー（腰布）姿の豆売りの老人を見つけることもできる。身なりに特徴はなくとも、多少ともインドの人々

の顔を見慣れた目には、顔の彫りや体格でそれと気づくことも多い。

インド研究を専門としてきた筆者は、一九九三年四月から九四年三月までの一年間、バンコクに滞在する機会を得た。タイの大学のなかで、チュラーロンコーン大学と勢力を二分するタマサート大学で「タイの地方行政」を研究することが目的であった。本来の課題を疎かにしたわけではないが、街ですれ違うインド人の姿は「職業柄」どうしても気になるものである。少しずつ調べ始めてみると、しだいにタイ社会のなかでのインド人の姿が浮かび上がってきていつそう興味を惹かれた。そのうえに、なにやらインド研究者の義務感みたいなものが頭をもたげてきてしまった、というのがこの本が生まれたいきさつである。本書に描かれているのはタイのインド人社会だが、それは同時にインド研究者の目に映じたタイ社会のひとつまだけということにもなるうか。

世界中に散らばるインド人の数は約一千三百万であるという統計がある。主な国別人口は、参考までに本書末の付表に掲げてみた。タイ一国のことを考えても、実際に何人のインド人がいるのかは、本当は確認が難しい。ましてや、一千三百万が正確な数とはいえない。しかしこれをおおよその規模と考えれば、世界の移民社会としては、イタリア人、華僑ないし華人につぐ大きな集団であることに間違いはない。日本の経済や社会とは、あまり深い関係がこれまでなかったから、在外インド人の問題は、一部の研究者を除けば、あ

まり注意を惹いてこなかった。しかし、歴史的にインドとの関係も深い東南アジアでは、マレーシアが人口の一割程度のインド人人口を抱えている。シンガポールでもインド人の姿は目立つ。東南アジアはインドと中国の文化圏が交差する地点であるだけでなく、インドと中国の移民が共存する地点でもある。

この本のなかで、筆者はタイのインド人社会の形成と現状を歴史的に跡づけるという方法をとった。また内容が浅くなることを恐れながらも、インド人社会の歴史、そして社会、経済活動のすべての側面を取り上げた。インド人社会のことを調べてゆくうちに、これらの社会では、これらすべての側面が分かち難く結びついていることに気づかされたからである。タイのインド人社会の有力者は、成功したビジネスマンであると同時に、宗教施設のパトロンでもある。受け入れてくれた異国との文化交流の窓口にもなる。ひとつの社会を営むために必要な多面的な機能を、限られた数の有力者によって担わねばならない移民社会では、普通に見られる現象なのかもしれない。

タイのインド人社会は、その規模についてはさまざまな推定がなされているが、現在でもせいぜい十万人という小規模なものである。タイの総人口は約五千八百万である。おなじ少数派といっても華人系の人々のタイ社会でもつ意味と較べれば、インド人の役割は微々たるものでしかない。したがって、研究や調査の対象としてもあまり蓄積がない。華

人についてはG・W・スキナー (Skinner) による古典的な著作があるが、タイのインド人については、それに肩を並べることのできるような研究はない。タイの研究者による「少数民族」の研究書でも、インド人問題が取り上げられることは稀のようである。また、視点をずらして、海外在住のインド人問題という方向からみてみると、同じ東南アジアでも、マレーシアや、かつてのビルマ(ミャンマー)については数多くの研究がある。とてもタイは比較にならない。

タイにおけるマイノリティという視点からみても、在外インド人の問題という視点からみても、どうやらタイのインド人社会は観察の網の目からこぼれ落ちてきた存在であった。この記録が、これまでの知識の欠落をわずかにせよ埋めることができれば幸いである。

バンコクに滞在中、私の頭のなかを去来していたひとつの思いがあった。一口にアジアといっても、そのなかで私たちの目はどちらかといえば、政治や経済面で関係の深い東南アジアに片寄りがちである。インドを含む南アジアはまだ実感からいって遠い存在にとどまっている。南アジアについては、貧困やカースト・宗教対立といった固定観念が、あまりに強く私たちの頭に根を張っていて、何か敬遠したくなる雰囲気すらないではない。しかし、韓国や台湾につぐ経済発展が賞揚されているタイが抱えている社会問題は、貧富や教育の格差にせよ、バンコクの都市問題にせよ、インドや南アジアのそれに劣らず厳しい

ものだ、というのが私の率直な印象である。アジアを南だ、東南だと区切るのはあくまでも認識上の便宜のためにすぎない。タイのインド人社会について考えることで、便宜上の区分へのこだわりから少しは自由になれないだろうか。そんなことも考えながら書きあげたのが、この本である。